

解釈学的現象学の方法論

伊 賀 光 屋

社会学，文化人類学，心理学，教育学，看護学，保健学などの分野の質的研究で用いられている方法論としては，次の四つの系統がある。

① 第一の流れは，フッサール現象学の影響を受けたシュッツの現象学的社会学，ガーフィンケルらのエスノメソドロジー，ジョルジらの科学的現象学，ムスターカスらの発見的方法などの流れである。これらに共通する方法は，形相的還元または超越的還元によって，社会関係，相互行為過程，心理過程などの本質構造を直観的・または内観的に把握するという方法である。

② 第二の流れは，ミードやデュエーのプラグマティズム，ブルーマーのシンボリック・インタラクショニズムの影響を受け，ストラウスとグレイザーによって生み出され，ストラウス，コービンやチャーマズ，クラークによって展開されているグラウンデッド・セオリー・アプローチの流れである。これらに共通する方法は，理論的サンプリングによる対象者の選定，コーディングとメモ書き，トランスクリプトの分析，絶えざる比較法と分析的帰納による理論の浮上法である。

③ 第三の流れは，シュライエルマッハー，ディルタイ，ハイデガー，ガダマーの解釈学，とりわけハイデガー，ガダマーの影響を受けた，ベナーらの解釈的現象学の方法，パッカー，アディソンらのデータに基づく解釈学的研究法，スミスらの解釈的現象学的アプローチなどである。これらに共通する方法は，ハイデガーの形式的告示と解釈学的循環の考え方を取り入れ，研究者が理論的前提をもったまま，やはり偏見や前提などの先構造をもった対象者と研究過程の中で地平の融合を図り，上位の本質構造に達しようとする方法である。

④ 第四の流れは，ヘーゲルの絶対精神の外化としての世界という考え方に影響され，バーガー／ルックマンの「日常世界の構成」やスペクターとキツセの「社会問題の構築主義」を経て，グーバヤリンカンの構築主義の方法に至る流れである。

すでに、「科学的現象学の方法論について」（伊賀，2008a）や「グラウンデッド・セオリーの方法論について」（伊賀，2008b）で，①や②の系統についてはその哲学的立場，方法論的性格，および分析技法の特徴について検討してきた。本稿では，③の系統の質的研究法の哲学的立場，方法論的性格，そして分析技法の特徴を検討する。

私の見解では，①も④も②や③とは哲学的前提に関してかなり異質な立場をとっていて接合は困難である。それに対して，②と③は哲学的前提では一定の親和的關係があるために，接合が可能である。それを反映してか，解釈学とGTを接合する方法はAddison（1989）やRennie（2000）によって呈示されている。GTについては，プラグマティズムの伝統に従って，パースペクティブアル実在論，可謬論的相対主義の立場を継承し，シンボリック・インタラクショニズムからは解釈の方法論を継承していることを明らかにした（伊賀，2008a）。そこで，本稿では，まず，解釈学的現象学がどのような存在論や認識論を展開しているのかを明らかにし，解釈学的現象学の諸方法がGTと接合可能である哲学的根拠について示したい。次に，解釈学的現象学が長い解釈学の歴史の中でどのような位置を占めているのかを明らかにし，そこで言われる解釈の特異な意味を論じ，それが質的研究方法ではどのように反映されるべきなのかを明らかにしたい。そして，最後に，解釈学的現象学の諸方法として提案されている質的データの分析技法を検討し，それらが解釈学的現象

学の哲学的立場に叶っているものなのかを論じたい。

I 解釈学的現象学を巡る実在論論争

ハイデガーの存在論は実在論なのか、それとも観念論なのかについては、様々な議論がある。Dreyfus (1991, 2002) によれば、彼自身はハイデガーを「**断固たる実在論者**」(robust realist)を志願しているの見なし、Blattner (1994) は「**超越論的観念論者**」(transcendental idealist)と見なし、Cerbone (1995) は「**収縮した実在論者**」(deflationary realist)と見なししていると言う。

Blattner (1994) は、ハイデガーを一種のカント派観念論者と見なすべきだと論じている。自然の事物が我々に依存しているか否かという問いに対して、経験論的立場に立てば、それは依存していないと論じうるが、存在についての超越論的立場に立てば、自然物が我々に依存しているか否かといった問いを立てること自体が出来なくなるのである。しかるに、カントは存在について問うことなく、自然的事物の超越論的観念論に迷い込んでしまったとハイデガーは批判していると Blattner は論じているのである。

Cerbone (1995) は、ハイデガーが自然的事物については実在論的な捉え方をしているながら、全体としての見解では、実在論にも観念論にも与していないと言う。ハイデガーは自然的存在者の理解可能性は(存在論的に)先行する道具の理解可能性に依存していると考えた。道具とそれを用いる実践が有意義的に結びついて構造化されているならば、自然的存在者は理解可能だと言うのだ。すなわち、事物的存在者としての自然的事物は、現存在の世界に参入することで、用途性をもった道具的存在者になるかその可能性が示されることで、理解可能となると言うのだ。だから現存在が存在しない場合には、「存在者が存在すると言うことも、存在しないと言うことも出来ない」と言われる。存在者についてのどんな断言も、それに先行して世界に慣れ親しんでいる必要があるので、現存在をそしてそれ故に世界を取り除くと、我々は自然的存在者を理解する条件が無くなってしまふ。ここで、存在者が存在するか存在し続けると言うことは、存在者について言っているのではなく、存在者の理解可能性について言っているのだと Cerbone は解釈する。

このように、観念論も実在論も現存在の世界内存在としての在り方を考慮することなく、主観と客体を截然と区別しそれらの間の相互浸透を無視しているとハイデガーが批判していると、Cerbone は言うのだ。世界内存在としての現存在は、観念論者の意味での純粋な主観ではなく、また現存在の住む世界は実在論者の意味での(諸客体から構成された)純粋に客観的なものでもない。そして、現存在の現象学は客観的世界の存在(実在論者の存在者の把握の仕方)を損なわずに、人間と世界を説明するのに純粋な主観や純粋な客体から始めることは出来ないことを示している、と Cerbone は言うのだ。

ところで、戸田山(2005)の独立性テーゼと知識テーゼを、ハイデガーの用語に近づけて表現し直せば、独立性テーゼとは、宇宙(自然界)の秩序とその構成要素たる諸事物は、我々の精神(意識、関心、理論)や対処方法(方法論、実践、関与)から独立している、と表現できる。また、知識テーゼとは、宇宙についての真の知識があり、それを得ることは可能であると表現できる。戸田山はファン・フレーセンの構成的経験主義などを反実在論として捉え、反実在論は独立性テーゼに賛成で、知識テーゼに反対するものと捉えている。

これに対して、Dreyfus (1991, 2002) は存在論のレベルで、独立性テーゼを巡る対立以外に、宇宙の秩序の単一性を巡る対立があるとする。宇宙の自然的現象間の関係を発見するという近代科学の主張を支えてきた形而上学的実在論は、① 宇宙は単一の秩序をもつ、そして、② その秩序と構成要素は我々の精神や対処方法から独立して存在する、と考えているとした。しかし、今日では反実在論(antirealism)がこうした主張を否定しているという。反実在論者は、宇宙が単一の秩序をもつことを認めながら、独立性テーゼを誤りとまではいえないが矛盾しているものとして捉えているという。そして、こうした考え方の代表であるデビッドソンの立場を**収縮した実在論**と呼んでいる。デビッドソンは、意味が究極的には不可分の実践、事物、そして心的内容に依存していると主張しているからだというのだ。

デビッドソンは、人間は自分が何者であるかをはっきりさせるには、同時に世界内の諸存在者について、他者の心の内容について、そして自身のコミュニティの言語慣習について学ばざるを得ない言語使用者だと考えている。こうした、言語の学習を理解するためには、学習者が、① すでに共有された事物を含む共有

された世界に接近して、② 彼らが参入しようとしている言語共同体のやり方のほとんどを共有していて、③ 自身やその他の人にとって信じなければならないことを理解し、そして④ そのコミュニティ内の大半の信念が正しいと考えている、と仮定する必要があるとする。そして、事物は実践と解き難く結びついていて「事物がある」という陳述は、その事物がそれ自体として独立して存在するという主張をしているのではなく、その事物がそこにあると記述しているだけであるとする (Davidson, 1991)。

さて、ドレイファスによれば、**収縮した实在論**とは次の①と②を主張する議論だとされる (Dreyfus, 1991, 2002)。

① 我々の実践から独立した諸事物自体について語ることは出来る (言いかえると、科学の諸対象も日常我々が目にする石や木と同じように存在する)。しかし、宇宙 (自然界) を構成している諸事物やその秩序ですら、我々の精神や、我々の対処方法から独立しているわけではない。いわんや世界 (人間が関心をもって意味づけている日常的な諸事物からなる意味連関) はまさに我々の精神や関与に依存している。すなわち、宇宙の構成要素はそれ自体で独立して存在するが、我々の精神や実践に依存している。この独立性テーゼに対する部分的アンチテーゼは、プラグマティズムのパースペクティヴアル实在論とそっくりではないのか。

② 宇宙 (自然界) は単一の秩序をもっている (Dreyfus, 1991, 2002)。

これに対して、ドレイファスによれば、**断固たる实在論**とは、次の①と②を主張する議論だとされる。

① 我々の実践から、それ自体、独立した諸事物に我々は接近しうる。この主張は、独立性テーゼに断固賛成する。そして、このテーゼは、科学は宇宙の諸構成要素が我々の日常の関心や感覚能力に基づいて姿を現す仕方と異なった仕方ですらそれ自体としての宇宙の諸構成要素に我々を接近させてくれると信じること、と矛盾しないと主張する。

② その代わりに、宇宙は有限数の異なる仕方ですら機能しうる。そしてそれぞれの秩序 (機能的全体) のもとに、それ独自の構成要素やその種が存在しているという多元的实在論を主張する。

宇宙は複数の秩序をもちうるが、その秩序を構成する構成要素に接近することは出来る主張する**断固たる实在論者**も、宇宙は単一の秩序をもっているが、それを構成する諸要素には我々の理論や実践から独立していないとする**収縮した实在論者**も、戸田山の分類で言えば、反实在論に含まれることになるが、断固たる实在論の方が科学的实在論より近いといえる。

さて以上の議論を踏まえて、Dreyfus (1991, 2002) に従って、ハイデガーの实在に関する論旨を平明に表現すれば、次のような議論をしているといえるのではないか。

私の関心によって、また何らかの目的や気分をもった日常の生活実践の中に現れるもの、人、出来事などとそれらの間の意味連関こそが私の生活世界であり、その中で、もの、人、出来事などは実践的に理解されていて、ことさらその文脈から切り離して説明する必要がないものだ。

「实在性 (Realität) は、存在論的な名称としては、世界内部的な存在者に関連づけられている。この名称が世界内部的というこの存在様式一般を表示するのに役立つとすれば、道具的存在性も事物的存在性も、实在の様態として機能を果たすことになる。だが (今日では) この語は、事物の純然たる事物的存在性という意味での存在を指している。・・・しかし、实在性は、世界内部的な存在者の諸存在様態の範囲内で優位をもっていなければ、・・・世界や現存在といったようなものを存在論的に適切に性格づけることはできない。」(SZ, 211; 訳II 195頁)

こういう意味で、世界内存在として立ち現れる限りでは、どのような事物も私の実践、私の関心に依存している。

「現存在が存在しているかぎりにおいてのみ、言いかえれば、存在了解の存在的可能性が存在しているかぎりにおいてのみ、存在は『与えられている』。現存在が実存していないときには、『实在の非依存的な独立性』ということも『存在する』ことがなく、『それ自体』ということも『存在する』ことがない。・・・そのようなときには存在者が存在するとも、存在者が存在しないとも言われないのである。そうはいつても、いまのところ存在了解と、それとともに事物的存在性についての了解内容が存在しているかぎりにおいて、おそらく言われうるのは、このようなど

きには存在者は存在しつづけるであろうということである。」(SZ, 212; 訳II 197頁)

しかし、日常の実践のなかで、それらのもの、人、出来事が支障を来した場合、私はそれらを生活世界の文脈から切り離して、一つの事物として、何であるか説明しようとする。

こうした事物的存在者も存在しないとはいわれない。また、道具的存在者を事物的存在者として超然として見る場合にも同様のことが生じる。

「世界内存在は、配慮的な気遣いとしては、配慮的に気遣われた世界によって心を奪われているのである。だから、認識作用が**事物的存在者**を考察しつつ規定するはたらきとして可能であるためには、世界と配慮的に気遣いつつ関係をもつことが欠損していることが先行的に必要なってくる。・・・世界へとかかわるこうした存在様式は、世界内部的に出会われる存在者をわずかにその純然たる外見(エイドス)においてしか出会わせないのだが、世界へとかかわるこうした存在様式を根拠として、また、こうした存在様式の様態として、そのように出会われるものを表立って眺めやるということも可能なのである。こうした眺めやりは、そのときどきに、何々をめぐって特定の方向を定めること、つまり事物的存在者に照準を合わせることである。それは、出会われる存在者からなる或る『観点』を初めから取り出している・・・(こうした眺めやりという)この種の停滞・・・のうちで、事物的存在者を認知することが遂行される。認知作用は、或るものを或るものとして語りだしたり論じあったりするという遂行様式をもっている。最も広い意味でのこうした解釈作用を地盤として、認知作用は規定作用になる。認知され規定されたものは、命題において言表され、そうした陳述されたものとして保有され保存されることができるのである。何々に関する陳述をこのように認知しつつ保有することは、それ自身世界内存在の一つの在り方なのであり、したがって或るものについての諸表象を主観が調達してゆくゆえんの『過程』だと学的に解釈されてはならないのである。・・・そのように解釈すると・・・それらの諸表象が現実性と『合致する』のかという問いが、生ずることがあるが、そのような解釈におちいつてはならないのである。」(SZ: 61-62, 訳I: 158-159)

ところで、自然科学者が自然を非世界化(脱文脈化)して、その原理、法則性を解明しようとして第三者的態度をとれば、それは事物的存在(手前に現前する様式)となり、手許にある様式のように理解することは不可能となり、説明するしかなくなる。

「自然とは何であるかは原則的には了解不能なので、原理的に説明可能でありまた説明されるべきである。それは純粋に、また単純に了解不能である。そして、我々が自然を物理学で発見されるように、その存在者としての極端な意味で捉える限り、それは『非世界化された』世界であるので了解不能である。」(Heidegger, 1985: 217-218)

しかし、

「存在者としての存在者は『それ自体で』存在し、そのいかなる了解からも独立している。しかし、実在の存在は、出会いの中でのみ見いだされ、その出会いの構造の現象学的開示や解釈からのみ説明しようし、了解される」(1985: 217)

道具的存在者を事物的存在者として注視する場合に、存在理解の内容は変化し、世界内の存在者は総じてその枠付けを除去され、存在者の超越を前提として、客体化(脱世界化)が図られる。道具的存在とは異なる他のものとして存在者は経験されるが解釈することは出来ない。そこで、理論的視点で、再文脈化が図られ、それに基づいて再解釈が行われるというのがDreyfusの捉えたハイデガーの考え方である。

しかし、Dreyfusはこうしたハイデガーの議論は、次の二つの点で、断固たる実在論を支持するのに失敗しているという。

① 現存在が用途性の外側で知覚された事物を単に含んでいるより広い日常の意味の捉え方を採用している場合、手許にある様式から手前に現前する様式への転換が生じて、それがその事物を「脱世界化」して

いることにはならない。

② 道具的存在者が壊れることで暴かれる存在の無意味さが、科学のデータとしてどのように役立つというのかについて、また我々の実践から理解不能なものを切り離しておきながら、それを扱いうるようになされる態度の転換後に、どんな種類の実践が残されるのかについての、説明がなされていない。

これらの点をとらえて、Dreyfus (2002) はハイデガーが断固たる実在論を志望しながら収縮した実在論にとどまらざるを得なくなったというのだ。

とここで、ハイデガーは自然科学の研究が一つの制度、近代的な文化的実践であると考えている。科学を一つの実践活動として捉える視点は、クーンの科学革命の議論と通じるものがある。クーンの科学革命論は通常科学に強力に抵抗する変則性が現れると、科学者は新しいグランドプランを創り出すということを言っているが、これをハイデガー流に読み直せば、理解不能な変則性を脱世界化し、再文脈化することで生み出されたグランドプランが、それまでの古いグランドプランを排除するということになる。こうした考え方は、科学が捉えている実在はそのグランドプランに依存しているということに等しい。

自然科学者が、自然の原理、法則性を解明しようという関心を持ち、科学的探求という実践活動を行って自然に迫ろうとする場合、自然現象は脱文脈化されているものの科学者の実践活動や理論に依存する。逆に、日常や科学におけるそうした関心や実践活動のないところでは、もの、人、出来事、あるいは自然が実在するか否かを世界的に問うことは不要であるし出来ない (Rouse, 1987)。

しかし、だからといって、そうした関心や実践活動のないところで、それらが実在していることを否定しているわけでは全くない。

「現存在の存在論的根拠が現存在の存在のうちにあるという事実は、現存在が実存する時にしか、またその限りにおいてしか、実在はそれ自体で、それであるものとして存在し得ないということの意味しない。」(SZ, 212; 訳II, 196頁)

もしハイデガーが以上のように考えていたと解釈するのが正しいとするならば、科学による実体の説明から科学的実践を除去することは出来ないということになる。そうした実践はハイデガーによれば実体の本質を構成する実践ではなく、実体の本質に接近するための実践である。ハイデガーはそれを**形式的告示 (formale Anzeige)**と呼んだ。形式的告示とは、意味連関を規定せず、ただ方向性については決定的な指示を与えることを意味している。つまりこの方法では、探求の着手方向だけが指示されていて、我々の探求の実践の中で、非本質的なことを一つ一つ理解し剥ぎ取っていき、最終的には本質的なものに近づいて、またその意味内容が満たされていくという方法である (図1参照のこと)。

ハイデガーにとってあるものの本質とはそのものの、そのつどの、私にとっての意味のことであると言っても良い。そのつど私のものであること (Jemeinigkeit) は存在の真正性あるいは虚偽性を決める前提条件であり、そうしたものの本質は人間の実存の中で見いだされるというのだ。あるものは、そのつど私にとって何であるのかという問いかけをもって、そのものに対処する中で、それぞれの文脈の中で、私にとっての意味が明らかになっていく。現存在、すなわち私という人間は、事物的存在 (= 経験的実在物) を捉える視点を示し (= 形式的に告示し)、そのつど (生活) 世界の中で、私にとってそれが何であるのかを表現しながら、その事物的存在の意味を開示していく。そのものは、次第に事物的性格 (手前現前性) に代わって、そのものの真正性、私にとっての、その場面での有意義性、用途性を露わにしていく中で、道具的性格 (手許存在性) をもつに至ると言うのだ。

ハイデガーはデカルト的な主客二分法に基づいて実在の根拠を主観側に求める近代的認識論を否定し、存在論を再興し実在の根拠を第一義的には存在に求めた。そのために現象学の解釈方法を重視するものの、フッサールの形相的還元による本質直観の方法は採用せず、それに代わって、本質に接近するための方法として形式的告示による「非関与的」言及を出発点とする現存在の現象学的解釈学の方法を展開したのだ (寺邑, 1997)。

ハイデガーの世界内存在の存在論とプラグマティズムのパースペクティブ実在論はともに、デカルト的主客二元論を超え、実在論と観念論の陳腐な対立を止揚している。探求者が歴史的・文化的に特殊な視点

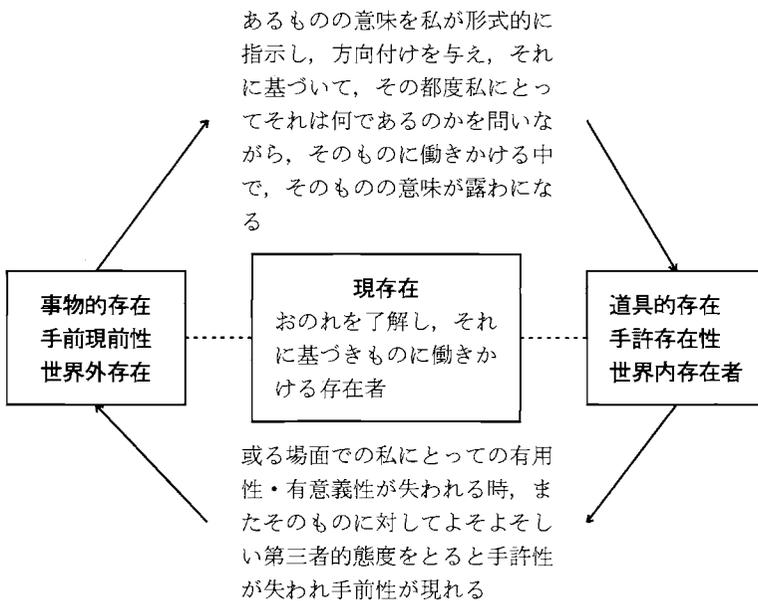
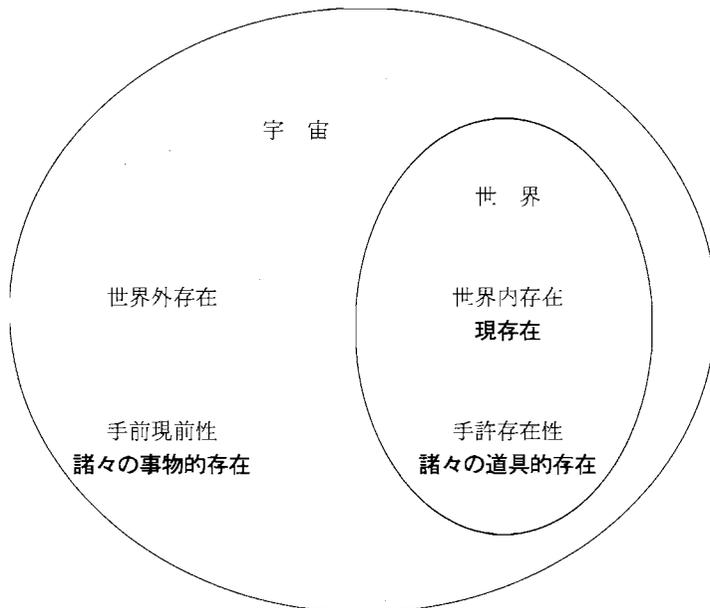


図1 物的存在・現存在・道具的存在

に立っていてそれから免れ得ないことを主張する点は、プラグマティズムと解釈学的現象学とに共通している。また、知識は行為の継続を妨げる問題を解決するための道具であるとするプラグマティズムの考え方は、手許性が損なわれたときに現前する事物的存在様式に対して、形式的告示によって方向性を定め、実践によって非本質的なものを一つ一つ除去していく解釈学的循環の方法に類似している。

そして、ともに、実践とその母体である共同体を重視している。世界は実践との関わりによって明らかにされるし、実践を支える視点は（言語、認識の）共同体によってすでに与えられており、そうした実践のなかで意味は受け継がれるとともに、新たに形成されていくと考えている。こうした立場に立てば、ある人々を研究するという実践は、当然のこととして、人々と直接的に関わり合い、自らの認識の共同体を前提としながら、人々の認識の共同体と交わり、融合し、新たな認識を生み出していくと言うことに他ならない。参与観察や非構造的聞き取りという調査技法は、人々と研究者の相互の共同体の交わりの場を提供しているものであり、そこで研究者が人々で行う相互行為こそ研究実践のすべてとあって良い。

II 解釈学とは何か (R.B.Addison, 1999 ; M.J.Packer, 1985)

(1) Hermeneuticsの原義

解釈学 (hermeneutics) の語の起源は、ギリシャ語の動詞 **hermeneuein** と名詞 **hermeneia** にあるといわれる (R.E.Palmer, 1969)。そして、**hermeios** はデルポイの神託所の司祭のことで、**herme** はゼウスの使者 **Hermes** を暗示しており、ヘルメスは人間の理解を超えた神の言葉を、人間が知りうる形式に変える役割を担っていたという。このように、これらの言葉の語幹には、異質で、見慣れぬ、分かりにくい事物、状況、表現を、理解しうるものへと変えるプロセスが暗示されているというのだ。Palmer はギリシャ哲学に示される、**hermeneuein** や **hermeneia** の使用法が三つの種類に分けうると述べている。それは、① 口に出して言う、② 説明する、そして、③ 翻訳するの三つである。

口に出して言うという意味での解釈は、聖職者が神の言葉を伝えて何かを公表したり、断言することを指している (**herme** は語源的に見てラテン語の **sermo** [言う] や **verbum** [言葉] に近い) という。この場合、口に出して言うことの中に、すでに事物を表現するやり方が含まれていて、口述の解釈者は、単に彼に過ぎない原文に、調子、強調、態度などを加えて、生き生きとした音に再生する。このプロセスでは、口述する前にすでに、表現するものを何らかの形で理解していなければならないが、その解釈的な読みとしての表現（口に出して言う）から、一つの理解が生まれてくる。原文の意味はこうして、口に出して言う過程で組み立てられる「文脈の意味の循環」に適合して与えられる語調によって表現される。口述の言葉には呪力や言霊があり、書かれた言葉が読み手に与えるのとは別の効力を聞き手に与える。つまり、口で伝えられたものは、たやすく理解される。そうした効力を生み出すのが、解釈の第一の意味方向として Palmer が指摘する、表現としての解釈である。

説明する という意味での解釈は、理解の推論的側面を強調したものだと言われ、Palmer は言う。ここでは、単に何かを言うだけでなく、何かを説明し、理屈付け、明確にする。そして口に出して言う明確な表現の中に、状況についての「意味」を与える。アリストテレスの **Peri Hermeneias** に示された解釈は、この説明のことである。アリストテレスは **hermeneia** を物語の真偽に関わるはずの陳述をする時の心の動きを指すものだという。アリストテレスは知性の働きを、① 単純なものの理解、② 構成と分解、③ 既知のものから未知のものを推測する操作の三つに分けて、意見の表明 (**enunciation**) を二番目の構成と分解と考えた。これは、ある事物の真偽の表明のことで、説明に他ならない。このように、説明としての解釈とは真偽が含まれている陳述を行うことである。こうした説明は表明された諸陳述を比較して生じる論理とは異なり、その後の解釈のための舞台を設定し、その後の解釈を形づくり、条件付ける、予備的解釈としての理解（先行構造）を与えるものである。説明的解釈は、理解が文脈に依存し、「地平的」であることを分かれさせ、テクスト理解のための「先行構造」に基礎を与える解釈であるとされる。

翻訳すること としての解釈は、異質な理解の世界での言説、行為、出来事を、それらの不朽の人的意義に照らして、見慣れた自分たちの理解の世界での言説、行為、出来事に置き換えることである。翻訳は異なる言語間だけでなく、同一の言語内でも、書かれたテクストの理解世界が読み手の理解世界と衝突している

ことをあからさまにする。こうした、地平の衝突を隠して、フォームやテーマの分析により解釈は終わると考えてしまえば、テキストは死んでしまう。それを読者の理解世界の中で生き生きと蘇らせるには、不朽の人間の意義に照らして、翻訳しなければならない。このように、翻訳としての解釈とは、まさにテキストの地平と読者の地平を融合させる作業のことだという。

(2) 人間科学の方法論としての解釈学

解釈学は聖書釈義、法解釈、そして言語的・文芸的分析の分野で長い間適用されてきた。そして人間科学の方法論として姿を現すのは19世紀末以降のことである。シュライエルマッハー以前の解釈学は、文法的解釈、歴史的解釈、美学的・修辭的解釈、そして事実上の解釈というように、解釈の課程で絡み合って作用している諸機能を別個に捉えていたが、シュライエルマッハーは普遍妥当的解釈のための方法、すなわち追構成としての理解の方法を確立したと言われる(W.Dilthey, 1900)。

シュライエルマッハーは、図2のように、解釈の領域を言語的解釈の領域と心情的解釈の領域に分けた。

「解釈学が二重の複合からなるということは、全ての技術と共通することであり、このことから言語的側面と心情的側面が展開されてくる。これら二つの側面のそれぞれが結局のところ一方の成果が得られることで他方の側も手に入れられるように展開されてくる。」(F.S.Schleiermacher, 1974. ビールズ訳 52~53頁)

「しかし言語の側面からみると、解釈学という技術学は、すべての陳述が言語から考えられ言語から把握されうるかぎりにおいてのみ客観的叙述だとみなされるといふことから生じてくる。しかしまた別の側面において陳述は、内容的に分析されるにしても、その余り本質的でない諸要素から自由に総合したものである以上、個人的行為としてまたその行為そのものとしてのみ発生しうるということからも生じてくる。二つの要因の調停のおかげで、理解や解釈は技術になる。」(F.S.Schleiermacher, 1913. ビールズ訳 53頁)

そして、ビールズの考えに従えば、それらと直交する二つの方法的次元、すなわち**比較法**と**予見法**を設定した。

「方法は二重的である。つまり直接的な直観と比較である。両者はお互いに助け合わねばならない。比較だけならば個性そのものに到達しない。直観は決して伝達されない。媒介は言語領域の全体性との比較である。

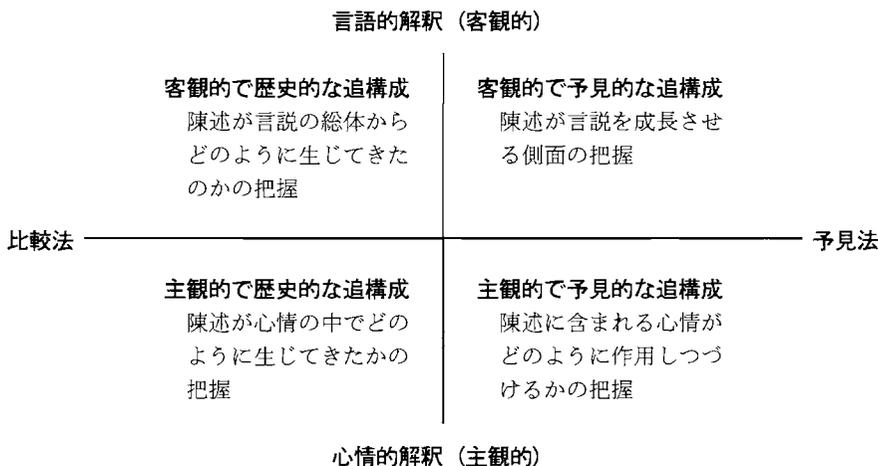


図2 解釈の領域と方法

(F.S.Schleiermacher, 1974. ビールス訳 60~61頁)

「予見法は、われわれ自身をいわば他人のなかに移し入れることによって個別的なものを直接的にとらえようとする方法である。比較法は、まず初めに、理解されるべきものを一般的なものとして措定し、次に、その一般的に捉えられたものに従って別なものと比較することによって固有なるものを見つける。この二つの方法は、お互いに分けられてはならない。というのは予見は、比較されなければいつも狂信的でありうるので、真とみなしうる比較によって初めて保証をうるからである。しかしながら、比較法は統一を保証することは出来ない。一般的なものと特殊なものとは、お互いに浸透しあわなければならない。このような相互浸透は予見によってしか生じない。」

(F.S.Schleiermacher, 1974. ビールス訳 61頁)

ディルタイはシュライエルマッハーの追構成の方法を継承し、基本的理解と高次の形式の理解という二つの水準を区別し、それらの間の循環という方法論を展開した。

ディルタイによると**精神科学 (Geisteswissenschaften)**は、内から体験される連関としての現実を対象とする学問であり、それを理解することから始まる。

理解 (Verstehen)とは、外から感覚的に与えられる徴表 (他人の挙動、音声、行為など) によって、内面的なもの (その徴表が表示している心理的なもの、すなわち認知、情緒、意志など) を認識する過程である。そして、理解には程度の差があり、① 自分に重要な点だけに関心をもって他者の内面的な生に関心を抱くことまでに達しない理解、② 他人のありとあらゆる表情、ありとあらゆる言葉を通じて、何が何でも他人の内面に進入しようとする理解、そして、③ 生の表示が固定して、いつでもその表示に立ち戻ることができるならば制御可能な程度の客観性が達成されようような技巧的理解などがある。この最後の持続的に固定した生の表示の技巧的理解を解釈 (Auslegung)と呼んだ。そして、文書の含んでいる名残を解釈し批判することが文献学の出発点であり、文献を解釈する技術の理論を**解釈学 (Hermeneutik)**と呼んだ。

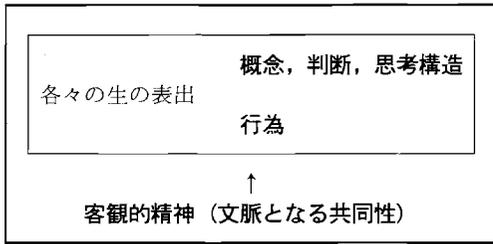
ディルタイは普遍妥当な解釈は理解の本性から可能になると考えた。つまり、解釈者の個性と解釈される著者の個性とは、比較しがたいものではなく、両者とも普遍的な人間の本性に基づいて形成されているために、お互いに語り合い、理解しうるのだという。解釈者が我と我が生身を著者の歴史的背景 (および文化的・社会的背景) の中に移し入れるならば、ある心の事象を強調し、他の心の事象を薄れさせることによって、自分のものならぬ生を自分のうちに追形成することができると考えた。

しかし、こうした解釈の過程で、大きな困難が待ち受けている。解釈は個々の言葉や、その言葉の結びつきから、ある作品の全体を理解すべきである、と同時に、個々の言葉を完全に理解するには、その前提としてすでに全体の理解がなければならない。個別が先か、全体が先かというこの循環は、個々の作品とその筆者の精神のありよう、また筆者の発展との関係においても繰り返されるし、さらに個々の作品とその作品の属する著述分野との関係においても立ち戻ってくる。このようにあらゆる解釈は、**部分と全体の循環過程**を延々と繰り返して、決して完結することはあり得ない。

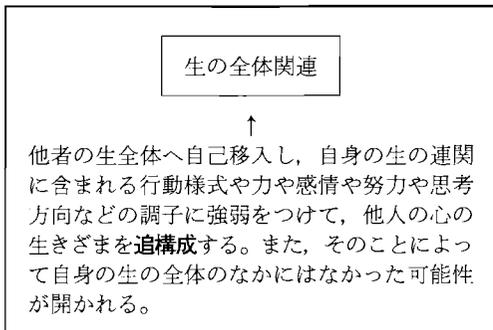
この問題に対して、ディルタイは、図3のように、**基本的理解と高次の形式の理解**という二つの層を設定し、それぞれの理解の方法論を展開する。

基本的理解とは、表現と表現されるものとの関係の理解である。たとえば、泣き声から悲しみを推測するとか、薪割りの動作から燃料の調達意図を推測するなどである。そして、こうした表現と表現されるものとの連関は、その連関を与える**客観的精神**から、推論される。

「客観的精神とは、個人間に成り立っている共同性が感覚の世界で客観化された多様な形態のことであり、生活様式、交際の仕方から、社会が形成してきた目的関連、道徳や国家や宗教や芸術や学問や哲学にまでおよんでいる。・・・この世界こそ、そのなかで他の人格およびその生の表示の了解が行われる、媒質でもある。・・・ここから、了解の過程にとって、重大な結論が出てくる。個人が把握する生の表示は、原則として、個人にとって、ただたんに個別的な表示であるばかりでなく、共同性についての知識と、共同性のなかで与えられている、ある内面的なものへの関係とに、いわば満ちている。」(W.Dilthey, 1910; 訳書 84~86)



基本的理解に基づく**実用的解釈**；徴表が表示している内面を客観的精神に照らして推論する



テキストや行為からもとの生の全体を人工的に再構成する、**高次の形式の理解**；与えられた生の表示から帰納推理によって生の連関全体を理解する。

図 3 解釈の階層

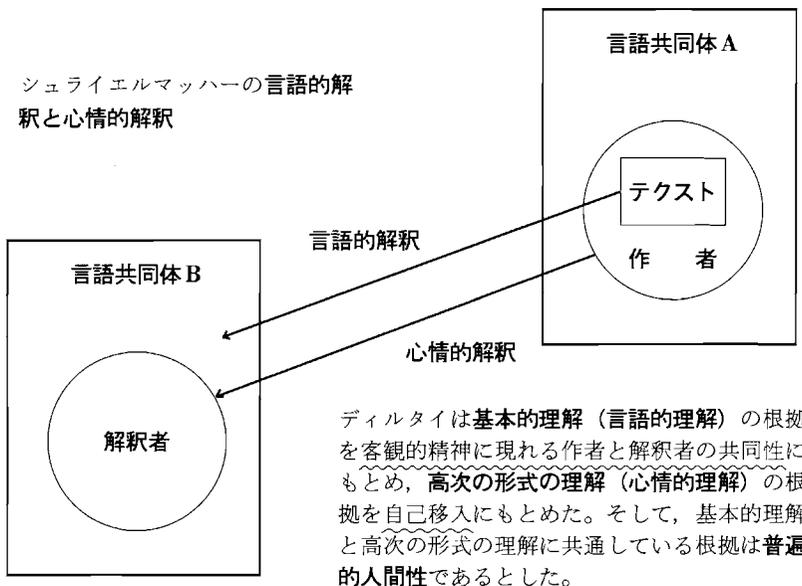


図 4 ロマン派解釈学の理解とその根拠

高次の形式の理解とは、与えられた生の表示から、帰納推理によって、ある生の連関全体を理解することであり、その生の全体への**自己移入 (Sichhineinversetzen)**によって成し遂げられるとされた。

「自己移入に基づいて、心の生活の全体が理解の中で最も有効に作用する追構成もしくは追体験が生じる。了解それ自体は、自己移入とは逆の操作である。完全な意味で生をとものにすることが可能なためには、理解のはたらきが、すでにおこった出来事それ事態の線上をを進んでいかなければならない。それが、たえず進みながら、しかも、生の経過それ自体とともに前へ前へと動いていく。そうしてこそ、自己移入、転置の過程が拡げられていく。追体験は、すでにおこった出来事の線上での創造である。」(W. Dilthey, 1910; 訳書 99~100)

そして、この追体験は、一方で、自身の生の連関に含まれている行動様式や力や感情や努力や思考方向などの調子を強めたり弱めたりすることで可能となる。他方で、追体験によって、自らの現実の生活の限定の中には存在していない可能性という広大な領域を開いてくれる。

このように、シュライエルマッハーやディルタイのロマン派解釈学は、著者の内面を再構成する方法論を確立しようとしたものである。彼らは著者と読者の間に共通する普遍的な人間性が存在するがゆえに、著者の内面は追構成しようと考えたのである(図4参照のこと)。

(3) 解釈学的現象学における解釈

ハイデガーの登場によって、未だに理解されていないことを、理解し意味を持たせ、分かるようにする試みは、解釈学の中心的課題であるだけでなく、我々の世界内存在の本質的側面であると考えられるようになった(Heidegger, 1927; Gadamer, 1975)。

ハイデガーは「解釈学」という言葉を存在論の文脈で用い、人間の意識よりも存在の事実性の方が根本的な事柄だと考えた。「存在と時間」の中で意図されていたのは「現存在の解釈学」である。彼の立場は、存在の事実性を意識の資料だと考えるフッサールの立場とは異なる。必然的知識を形相的還元によって追求するフッサールの認識論的現象学と対比されて、ハイデガーの現象学は解釈的現象学と呼ばれる。

ハイデガーは解釈学 phenomenology をギリシャ語の起源である、*phainomenon* (名詞) や *phainesthai* (動詞) と *logos* とに立ち戻って考察する。*phainomenon* は自らを示す当のもの、自己顯示し露わなものを意味するという。*pha*は光や明るさを意味し、***phainesthai***は「あるものを顕在化し、見えるようにすること」であるから、*phenomena*は「白日に曝されたもの、明るみに出されたもの、あるいは単にギリシャ人が存在者 (ta onta) と同一視したもの」(SZ, 28; 訳書 I, 72~73頁) であるという。

また、*phenomenology* の接尾辞 *-ology* は、ギリシャ語の *logos* に遡ることができ、それは「語りの中で伝えられること」であり、アリストテレスはその機能を *apophainesthai* として捉えた。これは「語りの命題的機能を指しているといえる。それは「〜として」現象を指す機能をもっている。つまり、ある事物が何であるかを露わにすることだというのだ。

であるから、*phainesthai* と *logos* とが結びついた ***phenomenology*** はギリシャ語では *apophainesthai ta phainomena* となり、「おのれを示す当のものを、そのものがおのれをおのれ自身のほうから示すとおりに、おのれ自身のほうから見えるようにさせる」(SZ, 34; 訳書 I, 87~88頁) ということの意味する。パーマーはこれを「外から何らかのカテゴリーを押しつけることなく、事物をそれがあがままに顯示する」(R.E. Palmer, 1969: 128) ことと表現している。また寺邑 (1997) は「理論的態度による生の経験の歪曲の回避に専念し、・・・理論化によって隠蔽された生の本来の姿を明らかにするために解体を行うことにより、事実的な生に迫ろうとする」(p.170) と述べている。この捉え方は、ものを指し示すというフッサールの志向性の考え方を百八十度反転し、ものが我々に自身を示すという捉え方である。解釈は人間の意識や人間の作り出したカテゴリーに根拠づけられるのではなく、遭遇する事物の顯示性、いいかえると我々に出会う現実 (実在) の中に根拠づけられることになるというのだ。

「現象学は、存在論の主題になるべき当のものへと近づく通路の様式であり、また、その当のものを証示しつつ規定する様式である。存在論は現象学としてのみ可能である。・・・存在と諸存在構造とが現象という様態において出会う様式は、現象学の対象からまずもって勝ちとらなければならない。だから分析の出発点は、現象へと近づく

通路および優勢な隠蔽をつらぬきとおし通行と同じく、それ固有のなんらかの方法上の保証を要求するのである。諸現象を「本質的」に「直覚的に」捕捉し究明するという理念のうちには、偶然的な、「直接的」な、無慮な「直観作用」がもっている素朴さとは正反対のものがひそんでいる。・・・現象学的記述的方法的意味は解釈である。現存在の現象学のロゴスは、ヘルメーネウエイン、すなわち、解釈スルという性格をもっているのであって、このものをつうじて、現存在自身に属している存在理解内容には、存在の本来の意味と、現存在に固有な存在の諸根本構造とが告知される。現存在の現象学は根源的な語義における解釈学なのであって、その根源的な語義にしたがえば、この語は解釈の仕事を表示している。」(SZ, 35; 訳書I, 36~37頁)

ハイデガーにおいては**了解 (Verstehen)**は、共感を意味したり生の表出から内的現実を捉えることを意味したりはしない。了解は何かを身につけることではなく、世界内存在の様式、あるいは構成要素とされる。現存在たる人間存在は、自らに関係する諸存在者の存在を了解しようとする。そしてまた、了解とは人間が存在する生活世界の文脈の中で、その人間が自身の存在の可能性を捉えることだとされる。だから、了解は存在論的に見て、実存のあらゆる行為に先行して、しかも常に将来に関係づけられる投机的性格をもつ。了解の本質は単にある人の状況を捉えることにあるのではなく、世界の中で自身が位置づけられた地平の中に諸々の存在の具体的可能性を開示することであるといえよう。

「了解の完成をわれわれは解釈と名づける。この解釈において了解は、おのれが了解したものを、「了解しつつ我がものとする。解釈というかたちをとっての了解は、何か他のものになるのではなく、おのれ自身になるのである。・・・了解が解釈をつうじて生じるのではない。解釈は了解されたものを承知することではなく、むしろ了解において投企された諸可能性を仕上げることなのである。」(SZ, 148~149; 訳書II, 47~48)

また、**了解は、すでに解釈された諸関係の集合、帰趨全体性 (Bewandtnisganzheit) の内部で作動する。だからある存在の了解は、そのものの有意義性 (Bedeutsamkeit), すなわち言葉や言語に先行し世界に埋め込まれている諸々の存在の有用性や他の諸存在との関係性の全体、の中でその存在をまずもって前叙述的に捉えることから始まる。**これは、寺邑 (1997) が明らかにしたように、初期のフライブルグでの講義で、ハイデガーの方法論の中心概念であった「形式的告示」(formale Anzeige) が発展した考え方である。形式的告示は類型的普遍化へと進む事象内容の分類たる形式化とは異なり、事象の具体的内容を示さず、その有意義性が浮かび上がってくる主体の状況を告知し、理解の出発点を知らせることである。

「道具的存在者を前叙述的に理屈ぬきで率直に見てとることはすべて、その見てとること自身に即してすでに了解しつつあり解釈しつつあるのである。・・・すべての解釈の根拠は了解のうちにある。解釈のうちで分節化されているものはそのものと、了解のうちで総じて分節されうるものとしてド図を描かれているものが、意味なのである。」(SZ, 149~153; 訳書II, 49~61)

そうであるから、**解釈は偏見や前提無しには不可能である。自明だとされるものはすべて「客観的」で「無前提的」だと錯覚している解釈者の前提に依存している。**こうした先行構造は、むしろ、主観と客体を含む世界の中にすでにあるものである。そして、そうした先行構造にもとづいて、前叙述的に、**生きられた関係の文脈 (帰趨全体性) の中で捉えられた存在が、了解の「手許にある」様式であり、それを定言的に命題化したものが「手前に現前する」様式に他ならない。**

「予持のうちに保たれている存在者、たとえばハンマーは、差しあたっては道具として道具的に存在している。この存在者がなんらかの陳述の『対象』になると、陳述の発端が置かれるとともに、或る転換が初めから予持のなかでおこなわれる。それでもって、従事し実行すべき道具的に存在する道具の対象は、それに関して提示しつつ陳述すべき『事物的対象』になってしまうのである。」(SZ, 157~158; 訳書II, 69)

このようにして、手許にある様式から存在者が摺り落ちると、それは、その有意義性を失い、一つの孤立

した事物に転じる。

「陳述が事物的存在者をそのものとして規定する当のものは、その事物的存在者そのものから汲みとられうる。解釈のとしてという構造は一つの変容をうけたわけである。そのような『として』は了解されたものが我がものにされるといふその機能において、なんらかの適所全体性をつかみだそうと手をのばすこともない。そのような『として』は諸指示連関を分節しうるおのれの諸可能性に関して、環境世界性を構成している有意義性から断ち切られている。」(SZ, 158; 訳書II, 69~70)

ハイデガーはこのように根源的な実存論的・解釈学的な「として」と理論的陳述の命題的な「として」を区別し、その中間に、環境世界において生じたものに関する記述、道具的存在者の描写、「状況報告」、「実状」の収録と確定、事情の記述、突発事の報告などを挙げた。参与観察のフィールドノートや非構造化インタビューのトランスクリプトなど質的調査で得られたテキスト・データもこの中間的な理解の様式に含まれるといえよう。さて、手前に現前する様式では、定言的命題で示された存在者をも事物的性格を帯びてくると言われる。

「陳述は解釈から派生したものだ。・・・ロゴスは事物的存在者として経験され、そうしたものとして学的に解釈されるのだが、それと同じく、ロゴスが提示する存在者も、事物的存在性という意味をもっているのである。」(SZ, 160; 訳書II, 74)

このように、ハイデガーの解釈学的現象学は、テキスト理解のための原理や規則を明らかにするものでも、人間科学の方法論でもなく、「現存在の解釈学」であり、現存在としての人間がどのように存在としての諸事物を理解していくのかを解き明かす、現象学としての存在論である。ここでは根源的理解から全面的理解へと至る解釈学的循環が想定されている。まず、特定の時空間を占めるある人の存在のあり方としての現存在は、先入見や偏見からなる先行構造をもち、自らの関心の地平にある諸事物の存在を根源的な形で前叙述的に理解している。そして、その人が自らの視点を明確化することによって諸存在の構造はその人の実存と行動のあり方を可能にしていく。こうして、諸事物の存在それ自体が全面的に理解されていくというのだ(Crotty, 2003)。

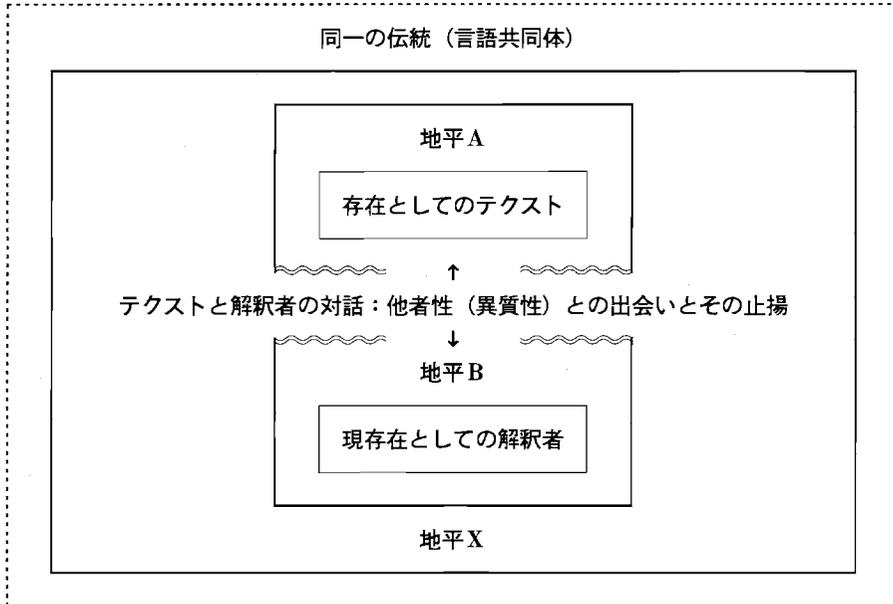
(4) 哲学的解釈学における地平の融合

スピノザやクラデニウスは理解と解釈が異なると考えていたことを、ガダマーは指摘する。理解は事柄の理解という意味のほか合意の意味があり、相互に共通の事柄を意図している状態を指すと考えられていたというのだ。そこで、理解が妨げられたときに初めて相互の異質性に気づき、その分からないところを分かるようにするために解釈が行われるというのだ。この場合、解釈学の課題は著者を完全に理解することではなく、言説や文書を完全に理解すること(文法的解釈)だと考えられていた。

それに対して、シュライエルマッハーは、解釈の問題はすべて理解の問題とされた。誤解は自然と生じるものであり、理解は達成の難しいことだと考えたという。そして、理解の方法としては、比較法(共通のものを比較する)と予見法(異質なものを予見によって推察する)を挙げた。この予見を可能とする基盤は一種の同質性(個々人は最低限の共通部分を持つ)にあると考えたという。

また、単に文面の客観的な意味だけでなく、話し手ないし著者の個性も理解されるべきだと考えたというのだ。このように、文法的解釈だけでなく、心理的解釈の必要性を論じた。この心理学的解釈とは、予見的(divinatorisch)態度をとって、作家の心理状態全体に自己移入し、著作執筆の内的過程を把握し、創造的行為を追構成することだというのだ。

シュライエルマッハーは、理解は常に循環運動であり、全体から部分へ、部分から全体へと繰り返し戻るのは、理解にとっては本質的なことであると考え、こうした循環運動が起きるのは解釈しようとしていることが一挙に理解できないからだと考えた、とする。そこで、シュライエルマッハーはよりよい解釈が解釈の目標であり、作者を作者自身が理解していたよりも、よりよく理解することが大切だと考えたというのだ。



地平Aにある存在としてのテキストを地平Bにいる現存在としての解釈者が理解しうる根拠は、解釈者の世界内存在としての自身の可能性を捉える様式である。

解釈者はテキストを手許にある様式として暗黙のうちに理解するが、読み進めるうちに、異質で見慣れない部分と出会い手許にない様式としての理解し難さにぶち当たる。このときに、それを言葉に出して表現し解釈を加える。こうして手前に現前する様式の理解が生まれる。このように、テキストの意味に対する同意と疑問視を繰り返しながら、地平Aと地平Bは地平Xとして融合し疑問は解消され理解が成立する。

そして、こうした理解が可能になる根拠は、地平Aと地平Bが時間的隔たりをもちながらも、同一の伝統、もつとはっきりと言い換えれば、同一の言語共同体に属しているからに他ならない。

図5 解釈的現象学における理解

ガダマーは、こうしたロマン派の解釈学をハイデガーに依拠して乗り越え、解釈学を言語を通しての存在との遭遇として捉えようとしたといわれる（R.E.Palmer, 1969）。ガダマーは解釈の進行を次のように捉えている。

まず、解釈者の先行意見が恣意的でないように、自らの用語法をそのまま持ち込むのではなく、著者の用語法からテキストの理解を始める。しかし、著者と解釈者の地平の隔たりから、必ずテキストの意味が酌み取れないとか、予期しなかった意味に出会うといった躓きの体験が生じる。その際に、テキストの他者性に対して感受性がなければならぬというのだ。この感受性は、中立の立場をとったり、自己減却することではなく、自らが先入見に囚われていることを自覚しながら、それを際立たせ、テキストの語る真理と対決させることだという。その中で、自らの先行概念を適切な概念に置き換えて、地平を融合して高次の理解に達するという道筋が想定された。

また、シュライエルマッハーの予見法で強調された内面への自己移入を批判する。

「シュライエルマッハーが主観的解釈として詳述したものは、完全に考慮の対象からはずしてもよいであろう。あ

るテキストを理解しようとするとき、ひとは著者の心理状態に自己を移し入れているのではない。・・・この（書かれたもの）意味は、それ自体で理解しうるものであって、そのようなものとして他者の主観性へ遡って理解しようという気を起こさせることはない。理解の奇跡を解明することが解釈学の課題なのではあるが、それは魂と魂の秘密に満ちた交感といったものではなく、共通の意味への参与なのである。」（H.G.Gadamer, 1960；訳書458～459）

そして、共通の意味への参与の条件は、自らの視点を捨てることではなく、視点を持つことであることを強調する。すなわち、他者との隔たりを前提とした地平の融合である。地平とは思考を拘束する有限の存在からなる遠近法的視覚をもった視界のことである。自らの地平をもつことで、テキストの異質性を一貫性をもって理解することができ、さらに地平の融合、言い換えるとテキストとの対話も可能になるというのだ。

「現代の基準や先入見からではなく、その過去固有の歴史的な地平において見るべきだ。・・・このように考えてみると、他者を理解するためには他者に身を置き換えなければならないということは、正当な解釈学的要求のように見える。・・・それは本当の対話ではない。・・・真でない対話においては、相手の立場や地平を突きとめたあと、その人の見解は理解できるようになるが、その人と理解し合うことはない。・・・我が身を置き換えることは、ある個性が他の個性に感情移入することではないし、他人を自分の尺度に従属させることでもない。それはつねに、自分の個別性ばかりでなく、他のひとの個別性をも克服して、自分をより高次の普遍性へと高めることを意味する。・・・理解とはいつものようにそれ自体で存在しているように思われる地平の融合の過程である。」（H.G.Gadamer, 1960；訳書474～479）

こうして、解釈学は、ガダマーが「地平の融合」と呼んだ循環的あるいは螺旋的形式での、前景と背景、部分と全体、解釈するものと解釈されるものの、「共同構成」（coconstitution）について語るようになったのである（図5参照のこと）。

M.J.Packer (1985, 1989)によれば、ハイデガーによって打ち立てられガダマーによって継承された解釈学的現象学は理論的前提から可能な限り自由に、その代わりに実際の理解に基づいて、注意深く、詳細なやり方で意味深い人間現象を記述し研究しようとする営みだとされる。人間の行為は複雑で曖昧な現象である。そして人々は観察者が完全には共有できない状況の中で行為するので、観察者は行われている諸行為の曖昧でない「意味」に直接的に接近することは出来ない。さらに、人々も自分たちの行為に関連する全ての側面を理解しているわけではない。どんな行為も、その状況から切り離してみれば、不透明で不明瞭なまでに曖昧である。そのために、行為の研究のための方法論はその込み入った事情や特異性に合わせて仕立てなければならない。

解釈学的現象学は、いかなる観察者も、曖昧さがあるにもかかわらず、人々が意図していることを予め実際に理解しているという事実を出発点とする。すなわち、理論的前提は現象学的還元によって判断停止するが、研究者や人々の日常生活世界の実際的理解を「解釈の循環（あるいは螺旋）」の出発点（最初の理解）として、すなわち理解の進化の前提として、採用する解釈学の一つの立場であると言える。

III 合理主義、経験論、そして解釈学（M.J.Packer, 1985; M.J.Packer & R.B.Addison, 1989）

M.J.Packer (1985, 1989)は合理主義のパラダイムを採る心理学（認知主義や構造主義）や経験論のパラダイムを採る心理学（実験主義や行動主義）と比較して、解釈学のアプローチの特徴を、① 知識の形態と起源、② 適切な研究対象、③ 追求する説明のタイプの三点から明らかにしている。

(1) 知識の起源

合理主義では、外的世界や感覚に基づく知識を疑い、コギト (cogito ergo sum)を唯一確実なものと考え、すべての知識、また神の存在から自然界の秩序までもコギトに基礎づけようとした。そして、知識の生成にとって最も重要なのは「理論化」だと考えているというのだ。個々人は科学的探究に於いても、日常活動に於いても、仮説の一般化と検証を通して世界を知るといふ。合理主義では、カント流の超越論的観念論の立

場が採用され、カテゴリー、ルール、概念そして原理といった一連の先験的条件によって、「もの」とカウントしうるものが決定されて、そこから人間の知識は生まれると考える。このように、知識は本質的に演繹的である。さらに、知識の発達（感覚的知性→操作的知性→理論的知性）も、理論化活動を導く内在的論理から生じるという生成的認識論を採用する。

それに対して、**経験論**では、知識は観察可能な「**非情なデータ**」によって基礎づけられ、これらのデータはいかなる解釈にも制約されない仕方で、確認され記録される「**世界についての事実**」と考えられているというのだ。色、音、温かさ、圧力、空間、時間やそれらの複合についての経験が基礎的感覚を構成する。こうしたセンズデータについての陳述を結合し操作するのに論理を用いる。センズデータが建材としての煉瓦であり、論理はそれらを結合するモルタルだと考えられている。このように、科学的探究の主な構成要素は、理論構築に先行し論理的に独立している、理論の制約を受けない「データの収集」だとされる。

解釈学ではこうした知識の基礎付けを求めず、探求の出発点として文化的、歴史的、個人的背景によって解釈者が予め世界に対して抱いている期待、関心、そして偏見といった先構造を解釈の出発点とする。そして、そこから解釈の循環に入り、よりよい解釈を求めて行く。このように、**知識の主な起源は実践活動 (practical activity)**、すなわち道具、人工物そして人々との直接的で、日常的な実際の関わり合いだと考えられているというのだ。こうした活動はいかなる理論化にも先行して存在し、それとははっきり異なる性格をもっている。最も顕著な点は、解釈なしに定義することが可能であるような「**文脈に拘束されない要素**」などは実践活動には含まれていないと考える点だ。

(2) 適切な研究対象

合理主義では、外的世界を疑い、人間の知識や経験の一部を再構成するという課題に取り組む。その際に、曖昧さや誤りに満ちた外観よりも、確実で信頼の置ける形式的抽象化の領域に関心を持つ。このように**外見から抽象的な構造**を研究対象として明示的に分離する。例えば、de Saussure (1966)にとって一つの抽象的体系としての言語が関心の焦点であり、実際の状況における個々人の話し方 (la parole) は関心的ではない。Chomsky (1957) は理想化された話し手・聞き手の言語能力を実際の言語パフォーマンスから区別し、前者を適切な研究対象とした。また、Piaget (1970) は知性を抽象化と可逆性を増大させる諸構造の構成という抽象的レベルで捉えようとした。そして、人間の行為は合理的で論理的な諸手続きの結果だとされる。行為は、推論、カテゴリー化、そして評価などの認知的プロセスによって媒介され、認知は意味の創造や真理の決定において、行為の前後で必ず関わってくるとされる。このように人間の行為それ自体は**本質的に合理的**だと考えられている。こうして再構成された構造は形式的で内的な関係のみを有し、文脈や状況との関係は剥ぎ取られる。

経験論では、世界が**解釈を含めずに記述**しうる基本的な要素からなっていると考える、これらの要素が研究の対象になり、それらの特性や相互作用を記述する。彼らにとって研究対象は文字通り**もの (objects)** である。心理学の分野ではこの経験論は有機体と環境との相互作用を研究対象とする。この相互作用は因果的諸力の機械論的相互作用と見なされている。そして、人間の行為はこれらの因果的諸力の直接的結果だと考えられている。例えば、習慣のような原因やパーソナリティ特性やIQなどの特性が作用して、その結果生じる人間の行為は自動的にまた客観的に決定されると仮定されている。こうして決定される人間の行為はいかにも**非理性的 (arational)** であるといえよう。

解釈学的探求では、人々が自らの社会的世界を構築し、またそれによって自らも構築されると考える。そして研究対象は、諸関係の抽象的体系でも、諸力の機械論的体系でもなく、**日常の実践活動の意味論的**でテクスト的な構造である。すなわち、人々の日常的な活動と、そうした活動の所産である制度、歴史、報告、記録、テクスト、物語、人生などに焦点を当てる。

(3) 説明のタイプ

合理主義アプローチが求める説明のタイプは、形式的特徴づけという説明である。諸現象はそれを構成する諸要素と要素間の関係からなる**構造モデル**を提示することで説明されたとされる。すなわち、説明とは、外見的に現れる現象を支える、基礎的な構造を正確に描き出すことである。そして、ソシュールは二項対立

的差異の体系を、ピアジェは数学的・論理的構造（群、環など）を説明のモデルの形式とした。

経験論では、観察が理論と結びつくことで説明が与えられたと考える。言い換えると、仮定された法則的な共起関係が経験的观察によって検証されること、あるいは一般法則と特定の諸条件の記述が結びつくことが説明である。観察データ内に規則性が見いだされれば、それは法則を得たことになり、法則を得れば、同種のデータを説明したり、特定の諸条件が観察された場合に共起現象を予測することができる。この法則は論理的規則ではなく、因果的・経験的な偶然性を表現する陳述である。例えば、行動主義では観察された「刺激」と「反応」とを結びつける因果法則が求められる。また、このパラダイムでは、時間性を考慮した場合、説明項（法則）が現象（被説明項）を予測するのに失敗すれば、その説明は不十分とされる。仮説演繹法の因果法則に代わって帰納的・統計的方法が用いられ統計的相関や確率的結合が求められても、説明の全般的目標は変わらない。

解釈学では、形式的構造や因果法則による説明に代わって、人間の行為を解釈する。そして、出来事や行為に解説を加える場合に、物語や自然言語の形式を用いる。解釈学的特徴付けは、論理的であったり因果的であったりするのではなく、意味論的である。

経験論と合理主義に共通していることは次の点である。

- ① 心と世界について二元論の見解をとっている。
- ② 真の知識は確固たる基礎（センス・データやコギト）に結びつけられなければならないと考えている。
- ③ 探求のモデルとして客観的な説明の方法を採用する。

そして、客観的な立場とは研究対象から距離を置き、解釈を差し挟まないことであると考え。そうした客観的な対象への接近を可能にするのが方法であるとする。

それに対して解釈学では、客観的といわれる技法や手続きとしての方法を拒絶する。解釈学が採用する視点では、対象から距離を置くことはせず、また対象についての陳述の評価は妥当性の検証によらない。解釈学では、解釈は人間の存在（現存在）のあり方そのものとして捉え、我々が対象に関わる様式を投企として捉える。

「理解はそれ自体、我々が『投企』(Enwurf)と呼ぶ実在的構造を有している。・・・投企は考え抜かれた計画に向かつて、また現存在がその存在に対して手はずを整えたことに従って行動することとは関係がない。逆に、いかなる現存在も、現存在として、すでに自身を投企している。そしてそうである限り、それは投企しつつある。そうである限り、現存在は、自身を常に理解しており、また可能性の点から自身を理解することになる。」(Heidegger, 1927/1962, 185; 邦訳II, 37~38)

我々は、新しい現象を研究しようとするとき、常に、その中に投げ出される。それに全く馴染みがないのでないならば、その現象がどんな種類のものか、そしてどんなことが起こりうるかについて、なんらかの予備的理解を有している。このことは、我々がそのことを理解しているとともに誤解していると言うことを意味しているというのだ。我々が期待や偏見によって、また我々の生活様式や文化、伝統によって形作られた「先構造」に適合するようにその現象を形作ることは避けられないという。このように理解は常に現存在によって投企された地平あるいは枠組みの中で生じるというのだ。

「理解することは、存在がその中で理解される特定の地平的枠組みへと投企することを意味する。」(Caputo 1987, 61)

IV 手許にある様式、手許にない様式、そして手前に現前する様式

M.J.Packer (1985, 1989)によれば、Heidegger (1927)の解釈は認識論的な理解ではなく、存在論的な理解であるとされる。すなわち、解釈とは理解の中で投企された可能性が分かるということだとされる。解釈は常に今起こりつつあることについての解釈者の日常的、常識的理解から始まり、それを明確にすることだ。そしてその中で、投企の様式が変化する。人々を理解しようとして、彼らや彼らの行動、彼らが引き起

こす出来事から距離を置き、第三者的に客観視することでは、歪んだ理解しか得られない。むしろ、彼らと積極的に関わり合い、彼らの行動や彼らが引き起こす出来事に巻き込まれ、主体的に参加することでしか、彼らのことを正しく理解することは出来ない。理解は認識論上の問題ではなく、存在論上の問題（投企）である。「それは何か」ではなく「それに自分はどうに関わりうるか」であるというのだ。

Heideggerによれば、日常世界において配慮（Besorgen）によって手許存在者のありかたを理解し、顧慮（Fürsorge）によって他の人間の在り方を理解し、洞見（Durchsichtigkeit）によって自らの存在可能性を開示しながらそれに関わって存在することが投企（entwurf）であり、理解である。自らの理解に向かって自らを投企し、理解するときに、その出発点として、自らが既に被投されている世界から出発するのが日常的理解である。その場合、これまで、そこあそこの諸世界での被投性を前提として、いまここでの世界が投企の場となる。当たり前のようにしてきた言語、文化、慣習のもとで産み落とされ、育まれたという事実性に基づいてでしか、自らの可能性に向かって投企しえない。そうした事実性のもとでは、人間は自らの「存在」を忘却している。こうした類落（Verfallen）から、人間に特有の気遣い（Bekümmernung）をもって、諸々の事物、他の人々、そして自分自身の存在可能性を開示していくことが理解に他ならない。

こうした、被投性（過去）－類落（現在）－投企（未来）といったハイデガーの存在論的理解の捉え方を、Packerは、存在の仕方（事実性）－現象（存在）－理解（実存）と捉え直した。そして、もの、人、自身を第一段階では包括的に捉え、第二段階ではそれらの「存在」あるいは別の仕方での現れ方を明確にし、第三段階ではその「存在」の意味および、それらが現れる地盤を明らかにする必要があるとした。

解釈学的研究は、物心二元論を否定し、真理の対応理論や基礎付け主義を否定する。そして、そうした認識論的基礎を求める代わりに、我々が相互に分かり合っている普通の日常的理解から探求を進める。すなわち、第一に、ある実践のコミュニティが慣習的に有している生活様式の場に参加し、そこで人々、行為、出来事を内側（イーミック）の視点で把握する。この段階では、インタビューにより聞き取り、観察により見取ることが行われる。第二に、そこで行われている様々な実践を固定化し、客観化し、テキストにする。そして、そのテキストのシンボル形式（語り、会話など）を研究者の（エティック）視点で解釈し、分析する。第三に、人々の慣習を支えている世界、行為の意味を生み出す文脈を明らかにする。これがパッカーの目指している日常性の解釈学としての解釈学的現象学のやり方である（図6参照のこと）。

(1) 手許にある投企の様式

Packerはまず、解釈過程の最初の出発点として、投企の手許にある様式（Zuhandenheit、道具的存在様式）を考えた。これは、道具を使って何かを作ったり、人と関わりを持ったりするような、日常生活世界の中で実際の計画に積極的に携わることである。われわれはこうした活動を実行する際に、本質的に全体論的な知り方をしている。すなわち状況を構成している様々な要素をバラバラな諸物として見ているのではなく、相互に関連した計画、可能な課題、挫折した可能性などなどのネットワーク総てを全体として知っている。このネットワークは明示されておらず、計画の背景として呈示されている。ここでは、よく考え抜かれた手段・目的などは存在しない。我々が用いる道具や自分の体も手段・目的の枠組みのなかに組み込みうる別々のものとして体験されることはない。実際の活動に従事しているとき、我々は自身の身体や道具に焦点を当てて知らうとすることはない。自身も道具も活動の中に融解している。例えば、金槌を使って何かを行っているときに、我々が経験しているのは金槌についての経験でも釘についての経験でもなく、箱を作るなどなどの経験をjしている。

実際の活動の特徴は、行為によって表現される関心によって構造化される状況の中に我々が常にいると言うことだ。もし、私が列車に間に合うことに関心があるなら、私の状況は、私の関心に関連する諸側面が際だつように組織される。時間と駅がまず際だち、私の住んでいる町を、最短のルート、一方通行の道、交通量などの点で経験し始める。私の行為も私の関心を顕示し始める。時刻表を探し、スーツケースを纏め、切符を点検する。私の情緒もそれに適合してくる。間に合うかどうかやきもきし、気が急ぎ、別れを悲しみ、旅にわくわくする。

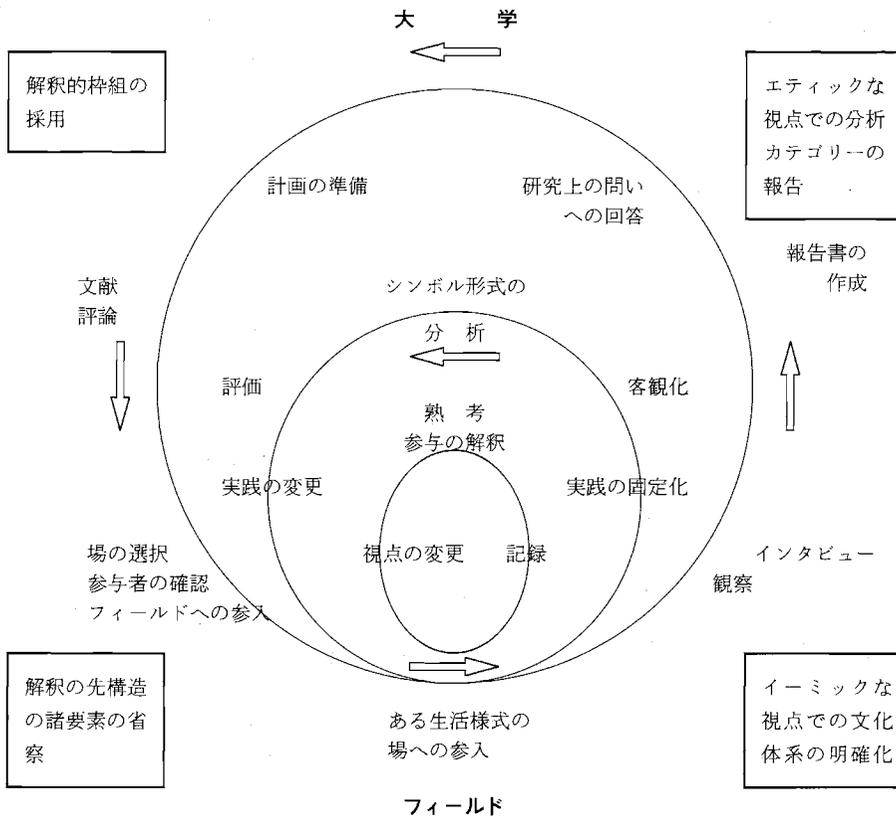


図6 Packerの解釈学的現象学の方法

(<http://www.mathcs.duq.edu/~packer/IR/IRmain.html>より引用)

(2) 手許にない投企の様式

日常活動の中では、そこで発揮する技能や用いるやり方は、いつも実践していて、よく知っていて当たり前と思っているので、その存在すら気づかないことが多い。しかし、何かがうまくいかなくなって、やっていることを反省するときになると、日常活動を支えている相互に関係しあう、やり方、技能、習慣のネットワークに注目し始める。凶の背景にあった地が目立つようになるのと同じように、問題に直面すると「手許にない様式」に入り込んでいく。例えば金槌で叩いていた釘が斜めに打ち込まれるとか、頭が潰れるのは金槌が重くて手元が狂うからとか、腕がくたびれるからだということに気づく。

(3) 手前に現前する様式

手許にある計画への今進行中の実践的関わりから自身を切り離さざるを得ないときには手前に現前する様式 (Vorhandenheit, 事物的存在性) に入り込む。発生した問題を解決しようする方法を持ち合わせていない場合、その問題を解決するために、論理的分析とか計算といった、より一般的で抽象的な、すなわち状況に依存しない「手段」へ後戻りして熟考しなければならない。いったいこの金槌の重さは何キログラムか調べ、柄の長さは何センチで、打面の広さはどの位なので、この釘の太さや板の堅さには向かないことが分かり、別の小振りの金槌に取り替えるなければならないことが分かるといった具合だ。

手許にある様式の接近方法の種類、すなわち情緒、慣習的なやり方、そして技能などは、理論的熟考によっ

て与えられる接近方法とは根本的に異なる。手許にあることは理論的には捉えられない。人々は日常活動のなかで、文化的で身体的な技能ややり方を構成し、又それらによって構成されている。それらのやり方や技能は暗黙知に他ならない。だから、明示化し得ないのだ。一方、手前に現前する様式では形式知が現れる。

(4) 解釈学的解説とその特徴

解釈の展開は、三つの投企様式と明確な関係がある。手許にある様式では、我々はある状況の進行中の理解(暗黙知)を有している。我々は人間の状況について暗黙の理解をしていて、それは我々が具体的な事実遭遇し、それらを明示するときの文脈を与えてくれる(Dreyfus, 1979)。手許にある様式は明示的な命題的知識とは異なり、それに先行している。これは総ての解釈の基礎である。手許にある様式は前叙述的である。そして、全体的関わり合いの点から理解されている。

我々はこの手許にある様式から始めて、次に解釈を展開していく。解釈は理解の中で投企された諸々の可能性を案出することだ。こうして、既にある理解されている「世界」が解釈され出し、手許にあることが明示的に見えてくる。解釈学的方法は、研究者の研究していることについての実践的理解を漸進的に開示し、詳説することを目指している。これはひるがえって、現象が姿を現し、形をとるようになる時の背景となっている関心、習慣そしてやり方に気づくことを含んでいる。解釈学的方法は、社会的やりとりのエピソードを詳しく漸進的に記述し、その仕組みを次第により詳しく分節化していく方法を採用する。

解釈学的方法の次の課題は、こうした前叙述的理解に手許にない様式を強要し、それによってテーマ的記述(thematic description)に接近させることである。そのための方法は、もともとの理解の中で問題有りと思われたことに集中することである。つまり、日常の実践の中で習慣的に見落としていること、不一致、そして矛盾に注目することである。こうして、解釈しようとしていることの重要な細部に光が当てられていく。最初から完全な理解などはない。解釈学的探究とは我々の理解をより分節化し、明確化していくための体系的で一貫したやり方のことだ。こうして、我々自身の元々の無反省的理解や、行為主体たちが自らやっていることについての自己報告の中にある前叙述的理解を超えることが出来る。解釈学は、行為主体自身の行為についての自身の解釈に完全に依拠して説明することから生じる主観主義を避ける。他方で、手前に現前する様式を手許にある様式に押しつけることはしない。

解釈学的方法は手許にある様式から出発する。これは全体的で反省以前の経験である。これに手許にない様式をぶつけてみる。すなわち内省と熟考により全体を分節化し相互に関連しているものを区別していく。これが解釈学のやることだ。しかしさらに、手許にある様式をふまえて、手前に現前する様式をそっと加えることは許されよう。

さて、手許にある理解としては、研究者自身の日常の実践活動における経験と、研究対象者の日常の実践活動における経験の報告との二つがありうる。前者に対して手許にない様式をぶつける方法が**発見的方法における「自己内省」**であり、後者に対して手許にない様式をぶつける方法が**解釈的現象学の「テーマ分析」**であると言える。

V 解釈学的方法論

解釈学的方法論は解釈の最初の出発点として、① ある現象の研究を始めたときの研究者自身の最初の理解か、② ある現象を経験した参加者の自己報告に表された理解を取り上げる。前者を出発点とするのがマスターカスの発見的方法であり、後者を出発点とするのがアディソンやパッカーの解釈学的現象学の方法やスミスらの解釈的現象学的分析の方法である。マスターカスは自己内省から始め、パッカーらやスミスらは参加者の自己報告から始める。そしてそれらのテキスト化されたデータは**テーマ分析**にかけられる。

(1) データに基づく解釈学的アプローチ R.B.Addison (1990)

R.B.Addison (1990) は解釈学とグラウンデッド・セオリーの絶えざる比較法とを結合した研究態度を**データに基づく解釈学的アプローチ**として呈示し、その基本的考え方と意義について次のように述べている。

① 解釈は誤った解釈の中から始まる。欠けていたり、誤っていたり、理解できないことがあれば、その誤った解釈や未だ理解されていないことに取り組まなければならない。これが、解釈学的探究の始まりである。

② 研究参与者たちの行動は意味をもっている。質的分析は、これらのあり得る意味を理解したり、研究参与者たちが、自らの行動の意味を理解出来るようにすることを目指す。

③ 言葉に表されたことだけが意味ではない。意味は行為や実践の中に表現されている。人間行動を理解するためには、日常の実践についての信念だけでなく、実践そのものを検討することが重要である。それ故に、インタビュー、フォーカス・グループ、自己報告サーベイに参与観察を加えなければならない。

④ 直接的文脈、社会構造、個人史、言語、共通の慣行、そして経済的諸条件が明らかにされたとき、意味はますます重要性を帯びてくる。データは常にこれらの背景の諸条件を念頭に置いて分析されなければならない。

⑤ 人間行為の意味や意義は固定的であったり、明瞭であったりすることは希で、曖昧である方が多い。意味は常に進行中の相互行為の中で決められていく。意味は時間の経過と共に変化し、文脈や個人によって異なる。それ故に、分析カテゴリーは、分析やデータ収集の進行の中で厳格に固定しておくことは出来ない。だからテキストの整理やコーディングの方法としてはテンプレート整理法ではなく編集整理法や没入／結晶化法を採用しなければならない。

⑥ 解釈は必然的に人間行為を理解すべきである。信念や行為がなんらかの固定的現実に対応している程度によって、真理が決まるのではない。真理を評価するための客観的で価値自由な立場などはあり得ない。事実は常に価値負荷的であり、研究者は何らかの価値を持ち込んで見ている。解釈者は研究者の偏向が問題の立て方、選ばれたデータ、なされた分析を色づけていることに注意しなければならない。

⑦ 研究的実践は参与者や研究状況に影響や変化を与えことに気づかなければならない。

そして、このアプローチは研究態度であり、一組の技法という意味での方法ではないが、次のような、七つのやり方を挙げる事が出来るとしている。

① 参与者たちの世界に没入し、彼らの日常のやり方 (practices) を理解し、解釈する。

② 個人の行為、出来事、および行動を超えて、その背後のより大きな文脈に注目し、それと個々の出来事との関係を検討する。

③ 研究参与者、研究者仲間、研究の批判者、解説それ自体、そして研究者の価値、過程、解釈および理解と積極的に対話し続ける。

④ 常に疑問をもつ態度を採り続け、誤解、不完全な理解、深い理解、代替的な説明、そして時間の経過や文脈の推移による変化を探す。

⑤ 循環的なやり方で、部分と全体、前景と背景、理解と解釈、そして研究者と語られた解説との間の進行を分析する。

⑥ 自己反省や変化したやり方を可能にする参与者の日常の実践についての物語的解説を呈示する。

⑦ より大きな社会的、文化的、歴史的、政治的そして経済的背景に照らして、研究者と参与者の実践的関心に取り組む。

従って、データに基づく解釈学的アプローチは、特定の問題に、気遣いと関わり合いをもった視点で取り組む。つまり、参与者の世界に没入し、人間行動を文化的、歴史的な文脈に位置づけられたものとして分析し、問題がどのように展開し、維持されるのかについての物語的解説を与え、積極的変化への方向を示すことである。

(2) 解釈的現象学的分析 (interpretive phenomenological analysis) のテーマ分析

J.A. Smith らの IPA は臨床心理学の分野での実践的研究を解釈学の方法論で支えようとして生み出された研究スタイルである。バックラーやアディソンのアメリカでの解釈学的アプローチから直接的に影響を受け

ていることもあり、やはり解釈学とGTを結合した方法論を展開している。かれらは、「IPAの目的は、参与者たちが彼らの個人的および社会的世界をどのように理解するのかを詳細に究明すること、すなわち特定の体験、出来事、状態が参与者たちに対してどのような意味を持っているのかを究明することだ」とのべている(J.A.Smith & M.Osborn, 2003)。

まず、かれらのいう解釈的という点から見ていこう。彼らが解釈学的ではなく解釈的という表現をとっているのは意味深長である。かれらは解釈学的循環における先行理解を重視する点でハイデガーやガダマーの解釈学的現象学の考え方を継承するかのようなことを言っているが、実際には、ロマン派解釈学の共感的解釈学(empathetic hermeneutics)と哲学的解釈学の異議申し立て的解釈学(questioning hermeneutics)とを結びつけようとしている。また、かれらは、参与者たちが理解しようとしていることを、研究者が理解しようとする、という意味で二段階の解釈過程を経て「部内者の視点」に到達するとしている。このように、かれらは必ずしも純粋にハイデガー・ガダマーの解釈学的現象学の立場をとっているわけではないのだ。

次に現象学的という点を見ていこう。かれらは現象学にはIPAが目指す個性記述的現象学(idiographic phenomenology)とA.Giorgiの実行している形相的現象学(eidetic phenomenology)とE.Husserlの超越的現象学(transcendental phenomenology)があるという。個性記述的現象学は、内省された個人的体験、いかえれば主観的な社会的世界の体験、の詳細な分析を目指すこととされる。また、形相的現象学は人々の間で共通する経験の本質的側面・一般構造を解明するとされる。さらに、超越的現象学では、純粋意識に傾聴しようとして、主観のプロセスの内容は無視するとされる。

そして最後に分析であるが、おそらくこの点こそこのアプローチの最大の特徴が出ているように思われる。かれらは、IPAが方法崇拜的(methodolatory)ではないと主張するが、彼らの最大の特徴が方法にあることは、かれらがまずもって実践的・臨床的関心があり、その哲学的根拠を求めて解釈学や現象学を援用していることから明らかである。そのために視点がフレキシブルになっているのではないだろうか。彼らは方法こそフレキシブルであるべきといっているが、彼らが最もフレキシブルにしているのは自らの哲学的立場である。

そこで、次に、彼らの方法について見てみよう。

まず、どのようなリサーチ・クエスチョンがIPAの方法に適しているのだろうか。スミスたちは「個々人が直面している特定の状況をどのように知覚しているのか、彼らが自分の個人的および社会的世界をどのように理解しているのかを明らかにしようとしている場合」にIPAが適していると述べている(J.A.Smith & M.Osborn, 2003:53)。

対象者の選定の方法としては、小さな等質的なサンプルを目的にかなったサンプリング(purposive sampling)によって選び出す。これは、リサーチ・クエスチョンが解き明かすのに役立つ限定的なグループを見つけ出す作業で、グラウンデッド・セオリーの理論的サンプリングと同趣旨の方法である。

データ収集の情報としては、半構造化インタビュー法が用いられる。この方法では、一群の質問項目からなる聞き取り項目票が準備される。まず、回答者との間にラポートを確立し、日常的対話の中で質問を挟んでいくので質問の順序はフレキシブルに変更される。そして、インタビューは回答者自身の関心や興味にそって行われるので特定の質問項目に対する回答が膨らんだり、脱線したりすることも許されるし、逆にインタビューの中で質問者の新たに生まれた疑問や関心をその都度聞き取ることも可能である。ただし、回答者はリサーチ・クエスチョンのテーマに関しては経験的エキスパートであるので、自身の物語を語る機会が最大限保証されなければならない。そのために、可能な限り質問者からの話のききかけをなるべく少なくして、その人が考えついた順序で考えた内容を最大限話す用に促さなければならない。つまり、質問者は聞き手に徹するということだ。そして、ほんの少しの探りやききかけの言葉以外口に出さないのが最良である。そして、質問は大まかな質問から、絞った質問へと進めていくのがよいとされる。質問は価値付加的でなく、中立的であるべきだとされる(この点は解釈学的現象学の対話とは全く相容れない)。また、職業語や技術的熟達を前提とするなどいわれる。これは、IPAの実践では質問者が臨床の専門家である回答者がクライアントであることが多いからだ。また、当然のこととして、選択肢式の質問はやめて自由回答式の質問を行うべきだとされる。

インタビューはテープで録音しトランスクリプトを作成することが勧められている。これは豊かなテクス

トが後のテーマ分析に欠かせないからである。

分析はテーマ分析の技法が用いられる。これには一種の編集整理法が用いられる。分析のステップは、まず最初の事例について

- ① トランスクリプトを丹念に読み返す
- ② トランスクリプト内で諸テーマを発見する
- ③ 諸テーマを結合（群化）する
- ④ テーマの一覧表（コードブックやテンプレートに相当する）を作成する

次に、

- ⑤ 他の諸事例をテーマ分析（①～④）にかけてテーマの飽和化を計る
 - ⑥ 飽和化したテーマ一覧表から高次のテーマを発見し、テーマを絞って焦点化する。
- ①～③がグラウンデッド・セオリーのオープン・コーディング、④が軸足コーディング、⑥が選択的コーディングに相当する作業である。

最後に、回答者たちから聞き出された一字一句に至るまで矛盾しないテーマを物語りの解説の形で呈示する。

（3） 解釈学的現象学におけるテーマ分析の意義

解釈学的現象学がテキストというものを解釈する際にテーマ分析法を用いるのは、テーマ分析によって話者の地平の中の諸事物の有意義性が研究者の視点から構成し直され、明らかにされるからである。第一の解釈者としての話者（インタビューの参加者）が自らの視界の中にある様々な出来事、自らの行為、諸事物、他者たちとその行為などに与えた意味とそれらの連関を解釈して語ったことを書写し、そのテキストをテーマ分析にかけることで、彼の地平の視野構造が露わになる。第二の解釈者としての研究者は、複数の話者のテキストをテーマ分析にかけて、彼らの共同の地平を自らの視点で読み取っていく。インタビューの過程ですでに、話者と研究者の共同構成や地平の融合はある程度進んでいるが、テーマ分析の過程で研究者は自らの視点を前面に出して話者たちの共同の地平を全体的に解釈しようと試みる。このようにテーマ分析は文法的解釈としてのテキスト積義を行うことでもないし、話者の内面を全体として明らかにすることでもない。それは、話者たちの共同の地平と研究者の地平を衝突させることで、話者たちの共同の地平の中の有意義性の連関を明らかにするとともに、彼らの視界からは見えないが研究者の視界からははっきりと見える話者たちの生活世界を支える意識されざる構造をも併せて解明する作業でなければならない。

参考文献

- Addison, R.B., 1989, "Grounded Interpretive Research: An Investigation of Physician Socialization" in M.J.Packer & R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 39-57.
- , 1999, "Grounded Hermeneutic Editing Approach", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks, California, 145-161.
- Benner, P., (eds.)1994, *Interpretive Phenomenology-Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Sage, London.
- Birus, H., 1986, *Hermeneutische Positionen*, Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 竹田・三国・横山 訳, 1987, 「解釈学とは何か」山本書店.
- Blattner, W.D., 1994, "Is Heidegger a Kantian Idealist?", *Inquiry*, 37:185-201.
- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, Inc. 後藤将之訳「シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法」・草書房1991.
- Bogdan, R., & S.J.Taylor, 1975, *Introduction to qualitative research methods*. New York:Jhon Wiley.

- Bollnow, O.F., 1949, *Das Aufsätze zur Theorie der Geisteswissenschaften*, Mainz: Kirchheim Verlag. 小笠原道雄・田代尚弘訳, 1978, 「理解するということ」以文社.
- Borkan, J., 1999, "Immersion/Crystallization", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks, California, 179-194.
- Boyatzis, R.E., 1973, *Alcohol and aggression: A study of the interaction*. Unpublished final report on Contract No. HMS-42-72-178, submitted to the National Institute of Alcohol Abuse and Alcoholism. Rockville, MD.
- , 1974, "The effect of alcohol consumption on the aggressive behavior of men", *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, 35:959-972.
- , 1975, "The predisposition toward alcohol-related interpersonal aggression in men", *Journal of Studies on Alcohol*, 36:1196-1207.
- , 1983, "Who should drink what, when, and where if looking for a fight", in E.Gottheil, K.A.Druley, T.E.Skoloda, & H.M.Waxman (eds.) *Alcohol, drug abuse and aggression*. Springfield, IL: Charles C Thomas. 314-329.
- , 1998, *Transforming Qualitative Information*, Sage Thousand Oaks, California.
- Bulmer, M.I.A., 1975, "Sociological Models of the Mining Community", *Sociological Review*, 23:61-92.
- Cerbone, D.R., 1995, "World, World-entry, and Realism in Early Heidegger", *Inquiry*, 38:401-421.
- Clarke, A.E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn", *Symbolic Interaction*, 26(4):553-576.
- Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods", *Studies in Symbolic Interaction*, 17:43-72.
- Charmaz, K., 2000, in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, second edition, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顕訳「質的ハンドブック2巻:質的研究の設計と戦略」北大路書房
- Charmaz, K., 2006, *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Crabtree, B.F., & W.L.Miller, 1999, "Using Codes and Code Manuals: A template organizing style of interpretation", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks, California, 163-177.
- Crotty, M., 1996, *Phenomenology and Nursing Research*. Churchill Livingstone, Melbourne.
- , 2003, *The Foundations of Social Research*, Sage, London.
- Davidson, D., 1991, "Three Varieties of Knowledge", in A. Phillips Griffiths (ed.), *A. J. Ayer: Memorial Essays*, Royal Institute of Philosophy Supplement 30 (Cambridge: Cambridge University Press, 1991):153-166 in A.J.Ayer (ed.) *Memorial Essays*.
- Dey, I., 1999, *Grounding Grounded Theory*. San Diego: Academic Press.
- Dilthey, W., 1914, *Gesammelte Schriften*, Bd. I, Stuttgart, 山本英一・上田武訳1981, 「精神科学 序説:社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み」以文社.
- , 1946, *Die Philosophie des Lebens. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910*, hrsg, von Herman Nohl. Vittorio Klostermann, 久野昭監訳「生の哲学」, 1987, 以文社.
- , 1957, *Gesammelte Schriften*, Bd. V, Stuttgart, 317~331, 久野昭訳, 1973, 「解釈学の成立」以文社.
- Douglas, J., 1970, "Understanding everyday life" in J.Douglas (eds.) *Understanding Everyday Life* Aldine Publishing Company, Chicago.
- Douglass, B.G., & C.Moustakas, 1985, "Heuristic Inquiry: The internal search to know", *Journal of Humanistic Psychology*, 25(3):39-55.

- Dowling, M., 2007, "From Husserl to van Manen, A Review of Different Phenomenological Approaches" *International Journal of Nursing Studies*, 44:131-142.
- Dreyfus, H.L., 1991, *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time*, Division I, Cambridge, MA., Massachusetts Institute of Technology. 門脇監訳「世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学」産業図書.
- , 2002, "How Heidegger Defends the Possibility of a Correspondence Theory of Truth with respect to the Entities of Natural Science", in Dreyfus, H.L., & M.A.Wrathhall (eds.), *Heidegger Reexamined*, London, Routledge, 219-230.
- Dreyfus, H.L., & C.Spinoza, 2002, "Coping with Thing-in-themselves: A Practice-Based Phenomenological Argument for Realism", in Dreyfus, H.L., & M.A.Wrathhall (eds.), *Heidegger Reexamined*, London, Routledge, 249-278.
- Feredy, J., & E.Muir-Cochrane, 2006, "Demonstrating Riger Using Thematic Analysis: A Hybrid Approach of Inductive and Deductive Coding and Theme Development", *IJQM*, 5(1):1-10.
- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社.
- Gadamer, H.G., 1975, *Wahrheit und Methode Grundzüge einer pilosophischen Hermeneutik*, J.C.B. MOHR, Tübingen. 巒田収・巻田悦郎他, 1986, 2008, 「真理と方法 I・II」法政大学出版会.
- Giorgi, A., 1970, *Duquwsne Studies in Phenomenological Psychology: Volume I*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房, 1985.
- , 1976, *Phenomenology and the Foundation of Psychology*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房, 1985.
- , 1985, "Sketch of a Psychological Phenomenological Method", in A.Giorgi (eds.) *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA.
- , 1992, "Description versus Interpretation: Competing Alternative Strategies for Qualitative Research", *Journal of Phenomenological Psychology*, 23(2):119-135.
- , 1997, "The Theory, Practice, and Evaluation of the Phenomenological Method as a Qualitative Research Procedure", *Journal of Phenomenological Psychology*, 28(2):236-260.
- , 1999, "A Phenomenological Perspective on Some Phenomenographic Results on Learning", *Journal of Phenomenological Psychology*, 30(2):68-93.
- , 2000a, "The status of Husserlian phenomenology in caring research", *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:3-10.
- , 2000b, "Concerning the application of phenomenology to caring research" *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:11-15.
- , 2002, "The Question of Validity in Qualitative Research", *Journal of Phenomenological Psychology*, 33(1):1-18.
- , 2004, "A Way to Overcome the Methodological Vicissitudes Involved in Researching Subjectivity", *Journal of Phenomenological Psychology*, 35(1):1-25.
- , 2006, "Difficulties Encountered in the Application of the Phenomenological Method in the Social Science", *Análise Psicológica*, 30(4):353-361.
- Glaser, B.G., & A.L.Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company, 後藤, 大出, 水野訳「データ対話型理論の発見」, 1996, 新曜社.
- Glaser, B.G., 1978, *Theoretical Sensitivity*, Mill Valley, CA:The Sociology Press.
- Glaser, B.G., 1992, *Basics of grounded theory analysis:Emergence vs foecing*. Mill Valley,CA: Sociology Press.
- Glaser, B.G., 1998, *Doing grounded theory: Issues and discussions*. Mill Valley, CA:Sociology

- Press.
- Glaser, B.G., 2002, "Conceptualization: On Theory and Theorizing", *International Journal of Qualitative Methods*, 1(2):1-31.
- Guba, E.G., 1978, *Toward a methodology of naturalistic inquiry in educational evaluation*. Monograph8. Los Angeles: UCLA Center for the Study of Evaluation.
- Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Duquwsne University Press, Pittsburgh.
- Haas, P.M., 1992, "Introduction: epistemic communities and international policy coordination", *International Organizayion*, 46(1):1~35.
- Heidegger, M., 1935, *Sein unt Zeit*, Halle: Max Niemeyer. 原佑・渡辺二郎訳, 2003, 「存在と時間」中央公論社.
- Holroyd, C., 2001, "Phenomenological Research Method, Design and Procedure: A phenomenological investigation of phenomenon of being-in-community as experienced by two individuals who have participated in a Community Building Workshop" *Indo-Pacific Journal of Phenomenology*, 1(1):1-12.
- Husserl, E., 1950, *Ideen-Zu einer reinen Phänomenologie und pänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch, Martinus Nijhoff, Haag. 渡辺二郎訳 1976 「イデーニ I」みすず書房.
- 伊賀光屋, 1986, 「モニタージュ・鑑屋」新潟大学教育学部紀要, 28(1):79-97頁.
- , 1997, 「参与観察『蔵』一蔵人の労働と生活」新潟大学教育学部紀要, 36(1):129~147頁.
- , 2000, 「産地の社会学」多賀出版.
- , 2003, 「出稼ぎから通勤へ—新潟県越路町の酒造出稼ぎの変化」*日本労働社会学 会年報 第14号*, 103~125頁.
- , 2005, 「品質構築のためのフレーミングとディカップリング—『有りがたし』のフレーミングと『よしかわ杜氏の郷』のアクター・ネットワーク—」新潟大学教育人間科学部紀要, 7(2):181~196頁.
- , 2005, 「外部スターによる工業的品質の構築と経路依存からの脱却—『加藤酒造』融米造り」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(1):49~64頁.
- , 2006a, 「職業コミュニティへと取り込まれる過程—杜氏になる—」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(2):171-182頁.
- , 2006b, 「企業コミュニティに埋め込まれた知識—朝日酒造の酒造技術—」新潟大学教育人間科学部紀要, 9(1):61-85頁.
- , 2007a, 「語りの中の職業コミュニティ—峯村杜氏のインビボ・コード—」新潟大学教育人間科学部紀要, 9(2):241-276頁.
- , 2007b, 「酒屋仲間と酒造コミュニティ」新潟大学教育人間科学部紀要, 10(1):21-32頁.
- , 2008a, 「科学的現象学の方法論について」新潟大学教育人間科学部紀要, 10(2):101-116.
- , 2008b, 「グラウンデッド・セオリーの方法論について」新潟大学教育学部研究紀要, 1(1):53-81頁.
- Islam, N., 1983, "Sociology, Phenomenology and Phenomenological Sociology", *Sociological Bulletin*, 32(2):134-452.
- King, N., 1998, "Template Analysis", in G.Symon & C.Cassell (eds.), *Qualitative Method and Analysis in Organizational Research: A practical guide*. London, Sage. 118-134.
- Lincon, Y.S., & E.G.Guba, 1985, *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Mall, R.A., 1993, "Phenomenology-Essentialistic or Descriptive?", *Husserl Studies*, 10:13-30.
- McPhail, C., & C.Rexroat, 1979, "Mead vs. Blumer: The Divergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism", *ASR*, 44:449-467.
- Miller, W.L., & B.F.Crabtree, 1999, "Clinical Research: A multimethod typology and qualitative roadmap", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 3-30.

- , 1999, "The Dance of Interpretation", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 127-143.
- Mills, J., A.Bonner, & K.Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" *International Journal of Qualitative Methods*, 5(1):
- Mills, M.B.& A.N.Huberman, 1994, *Qualitative Data Analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.) Sage, Newbury Park, CA.
- 森秀樹, 2008, 「開示性の自然学的記述の意味」理想第680号;27~37頁
- Moustakas, C., 1961, *Loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall.
- , *The touch of loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall.
- , 1990(a), *Heuristic Research: Design, methodology and applications*, Sage, Newbury Park, CA.
- , 1990(b), *Heuristic Research: Design and methodology*, *Person-Centered Review*, 5(2):170-190.
- , 1994, *Phenomenological Research Methods*, Sage, Thousand Oaks. California.
- Packer, M.J., 1985, "Hermeneutic inquiry in the study of human conduct", *American Psychologist*, 40:1081-1093
- , 1989, "Tracing the Hermeneutic Circle: Articulating an ontical study of moral conflicts", in M.J.Packer & R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 95-117.
- , 1989, Packer M.J., & R.B.Addison, 1989, "Evaluating an interpretive account", in Packer M.J., & R.B.Addison (eds.), *Entering the Circle: Hermeneutic investigation in psychology*, Albany, State University of New York Press. 13-36.
- , 1991, "Interpreting Stories, Interpreting Lives: Narrative and Action in Moral Development REsearch", in M.B.Tappan & M.J.Packer (eds.), *Narrative and Storytelling: Implication for Understanding Moral Development*, *New Directions for Child Development*, 54:63-82.
- , 2000, "An Interpretive Methodology Applied to Existential Psychotherapy", *Methods Annual Edition*, 493-514.
- , "Interpretive Research." <http://www.mathcs.duq.edu/~packer/IR/IRmain.html>
- Palmer, R.E.1969, *Hermeneutics: Interpretation theory in Schleiermacher, Dilthey, Heidegger and Gadamer*. Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Patton, M.Q., 1990, *Qualitative evaluation and research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Rennie, D.L., 1998, "Grounded Theory Methodology: The Pressing Need for a Coherent Logic of Justification" *Theory & Psychology*, 8(1):101-119.
- , 2000, "Grounded Theory Methodology as Methodical Hermeneutics" *Theory & Psychology*, 10(4):481-502.
- , 2007, "Hermeneutics and Humanistic Psychology", *The Humanistic Psychologist*, 1:1-26.
- Rennie, D.L., & K.D.Fergus, 2006, "Embodied Categorizing in the Grounded Theory Method", *Theory & Psychology*, 16(4):483-503.
- Rouse, J., 1987, *Knowledge and Power: Towards a Political Philosophy of Science*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- Ryan, G.W., & H.R.Bernard, 2003, "Techniques to Identify Themes", *Field Methods*, 15(1):85-109.
- Ryan, G.W., & T.Weisner, 1996, "Analyzing words in brief descriptions: Fathers and mothers describe their children", *Cultural Anthropology Methods Journal*, 8(3):13-16.
- Schleiermacher, F., 1998, *Hermeneutics and Criticism*, Cambridge: Cambridge University Press.

- Silverman, D., 1993, *Interpreting Qualitative Data: Methods for analysing talk, text and interaction*. London: Sage.
- Silverman, H., 1987, *Inscription: Between Phenomenology and Structuralism*. Routledge Kegan Paul, New York.
- Smith, J.A., 2003, *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*. London, Sage.
- Smith, J.A., R.Harré & L.Van Langenhove, 1995, *Rethinking Psychology*. London, Sage.
- Spiegelberg, H., 1982, *The Phenomenological Movement*, Martinus Nijhoff, Hage, 立松弘孝監訳「現象学運動」世界書院
- Strauss, A.L. & J.Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, 1998, 操, 森岡訳「質的研究の基礎」, 1999, 医学書院.
- , 1994, "Grounded Theory Methodology," in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, Sage Publications.
- Strauss, C., & N.Quinn, 1997, *A cognitive theory of cultural meaning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Streeter, R., 1997, "Heidegger's formal indication: A question of method in *Being and Time*", *Man and World*, 30:413-430.
- 寺邑昭信, 1997, 「形式的告示について—初期ハイデガーの方法論」鹿兒島大学法文学部『人文学科論集』46:169~189頁.
- Tiryakian, E., 1965, "Existential phenomenology and sociology" *ASR*, 30:674-688.
- Van Maanen, J., & S.R.Barley, 1984, "Occupational communities: culture and control in organizations", *Research in organizational behavior*, 6:287~365.
- Van Maanen, J. 1988, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, Chicago, The University of Chicago Press.
- Van Manen, M., 1990, *Researching Lived Experience — Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, State University of New York Press. London Ontario, Canada.
- , 2002, *Phenomenology Online*, <http://www.phenomenologyonline.com/>
- 山本與志隆, 2002, 「ハイデガーにおける実存の真理について—真理についての解釈学的循環とその終結—」愛媛大学人文学会『人文学論叢』4:133~143頁.